作品
旧テーテンス別邸

設計
前川國男

居間からの眺望。天井下すべてをガラス建具としている。

前川建築に泊まり、建築史の考察を

長年、現存する前川國男の戦前の木造建築は「前川國男自邸」（江戸東京たてもの園へ移築）のみとされてきた。しかし、2020年に新たに発見されたのが、この「旧テーテンス別邸」である。前川の木造モダニズム建築に宿泊できる希少な機会に、私たちは何を学ぼうか。

取材・文／橋本 純　写真／藤塚光政

南面外観。丸太柱が軒を支える。居間、テラス、庭、そして目前の海へと空間が開けていく。

購入した平屋の隣に立つ
どこか味わいのある日本家屋。調べていくと
前川國男の建築だったと判明した。

発見された家

「旧テーテンス別邸」は「発見された家」である。建築家・前川國男がドイツ人設備エンジニアのアウグスト・ペーター・テーテンス（1883〜1966）の依頼で設計し、42年に竣工した。所在地は熱海市伊豆山稲村、戦前からの別荘地に立つ。近くには「前川熱海別邸」も立っていたが、そちらは人手に渡ったのち、取り壊されたという。

この「旧テーテンス別邸」と「前川熱海別邸」は、前川國男の生誕100年を記念して開催された展覧会のカタログ『建築家・前川國男の仕事』（美術出版社、2006）と、松隈洋『建築の前夜 前川國男論』（みすず書房、2016）の、どちらにも記載がない。松隈によれば、銀座にあった前川の事務所は45年の東京大空襲で焼失し、戦前の図面が残っておらず、原図を持ち帰っていた前川自邸は難を逃れたとのことである。松隈は、前掲書において、前川は35年の独立から戦争が始まる41年12月8日までのあいだに、12軒の計画案を含む31軒の住宅を設計していると記しているが、戦争中の住宅設計に関しては自邸以外言及していない。戦前に竣工した「守屋邸」(36)、「佐藤尚武邸」(37)、「笠間邸」(38)の4軒の木造住宅については言及しているが、それらはいずれも掲載された建築専門誌の誌面を参考にしたと述べている。

図面などの資料が失われたため研究者のあいだでも確認がなされておらず、それゆえ公式の記録に記載されていないこの住宅が、ある日「発見」された。そして現在は宿泊施設としても利用可能になっている。そこまでの経緯を辿る。

発見の経緯

所有者は「旧テーテンス別邸」の隣に別荘をもつ夫妻である。夫妻は、古くからの友人である佐々木幸壽さんに、伊豆方面に別荘をもちたいと相談をもちかけた。彼らが連れだって足繁く伊豆方面を渉猟していると、ある不動産屋から「旧テーテンス別邸」の隣の小さな木造平屋を紹介され、目の前に広がる海に惹かれて購入した。

DIYで改装し別荘として使い始めると、隣に立っている「旧テーテンス別邸」が気になり始めた。いい感じの日本家屋だが使われていないようなので、手に入れたいと思い、持ち主を探し出して交渉し購入するに至った。その持ち主とは、テーテンス亡き後、長くテーテンス事務所の所長を務めた葉山成三の親族であった。

「旧テーテンス別邸」を購入したとき、夫妻はこの建物が前川國男の設計であることは知らなかったが、ご近所情報で、前川さんが関係した建物らしいという噂は聞いていたという。「前川熱海別邸」には、内務官僚だった前川の父親・前川貫一が公職を離れた後に住んでいた。戦争末期の金属回収令の際、率先して働きかけをしたことで熱海市から表彰を受けた記録があるので、この地域の人たちのあいだで前川という名前が知られていたことは十分に想像できる。

購入した日本家屋の設計者が前川國男という有名な建築家らしいということで、夫妻も興味をもって前川について調べ始めた。

雨漏りで一部柱が朽ちているなど、かなり傷みがひどかったにもかかわらず、夫妻はこちらもDIYで修復し、住宅として使い始める。海外渡航などで長期間家をあけることが多いため、そのあいだは宿泊施設として有効活用しようと考え、2020年に旅館業法の認可を得て簡易宿所として登録し、開業した。

そして先述の佐々木さんが、本業の傍ら「合同会社いとへん」を立ち上げ、「旧テーテンス別邸」の宿泊施設としての管理運営業務を請け負っている。

開業後、噂を察知した建築系宿泊客から、本当に前川國男の設計なのか確かめるべきだと請われた。そこで前川建築設計事務所

当時の雰囲気を保ちながら
所有者自らが
丁寧にDIYで改修した。

↑南側より見る。平面はくの字形に折れ曲がっている。

↓東側の階段を降りていくと、青々とした木々の中に建物が現れる。

Tetens' Second House by Mayekawa Kunio

写真下左／台所。右手には、大きな片持ちの棚。下右／東面の出窓から室内を見る。

↑台所より居間を見る。左奥に玄関があり、石積壁のホールには暖炉が設置された。

に問い合わせて調べてもらったところ、なんとテーテンス事務所に青図のコピーが残されていたことが判明した。図面内容と実際の建物が一致していることから、この建物が前川國男設計の「旧テーテンス別邸」であることが確認された。その後、実測図が作成され、登録有形文化財に登録された（22年10月31日）。

長くなったが、以上が「発見」までの概要である。

理想的ヴィラの数学と透明性をめぐって

建物は、西側に位置する道路から急な階段を降りてアクセスする。相模湾と初島を眺めつつ下っていくと、手前にくの字形の屋根が見えてくる。南側を向いた居間・食堂棟の西側に、45度振れてふたつの寝室、浴室、トイレを納めた棟が接続する木造平屋の建物が現れる。

さて、本稿の趣旨は「名住宅に泊まって学ぶ」である。なのでなんらか「今日のお宿」から学ばなくてはいけない。ひととおり歩きまわった後、プランを見る。両棟が少しずれて接続していることが気になる。翌朝まで時間もたっぷりあることだし、この一見不自然な平面構成を読み解いてみることにしよう。

簡単な補助線を入れてみる。まず、ホールと物置を、北西側の屈曲部を頂点として切り離してみる。この部分は、構造上は下屋の扱いになっていること、ホールは石貼りで土間と解釈できること、物置とその西側の小部屋はかつては台所と使用人部屋であったことから、付属部分と位置づけられる。次に、南側の2本の円柱をつなぐ線を西側の棟まで伸ばしていくと、建物は48 50㎜幅の矩形が中央で45度に折れてつながる単純な図形に還元できた。ではなぜこのプランは単純形態ではなくずれて接続するに至ったのか。

南側の2本の円柱の太さは、室内の2本の円柱と同じである。なので架構上は、南側のガラス面までではなく、先ほど補助線を描いたその先の円柱までが主屋である。したがってこの一見軒下のように見える部分は、ガラス面のセットバックによって生み出された外部化された内部と解釈できる。

居間・食堂を3640㎜角の正方形をふたつ並べた天井高3000㎜の空間とし、回縁と長押で明確に完結させているにもかかわらず、天井の高さや柱の太さと配置から見れば、この吹放しの空間は、明らかに内部空間の拡張領域である。両義的な空間がつくられている。

下屋ではない、もちろんピロティでもない。むしろポルティコと呼びたい半外部空間がつくられている。神殿前面の列柱廊と同様の形式だ。そしてこの構成は、「守屋邸」、「前川自邸」、資料がないので平面図だけからの憶測だが「佐藤尚武軽井沢別邸」と「前川熱海別邸」に見られる前川の戦前の住宅に共通する特徴である。モダニストとされる前川の住宅の居間に古典主義を見た。あるいは前川の建築に建築の歴史の厚みが見えたといってもいいだろう。前川自邸の左右対称平面の謎も氷解する。

この建築の平面には、古典主義的な平面構成と空間の両義性が併存する。その点においても、前川はル・コルビュジエの弟子であった。

名住宅での宿泊という貴重な機会。平面構成を読み解きながら建築をめぐる妄想に耽る。

↑個室2。メインの寝室として使用されている。景色や波の音から、海を感じられる。

←個室1。もうひとつの寝室。

妄想の時空間

さて、名住宅といえども、しょせん個人住宅であり、そこには建主の癖というものが表れる。かゆいところに手が届くホテルのような万人向けのつくられ方はしていない。これは泊まってみての実感である。言い換えれば、建物はこちらを向いていないということである。だから泊まる側はそっけない相手に対して妄想するしかない。ある意味片想いであり、街ですれ違った美人に対して勝手に妄想を膨らませている隠微な時間に似ている。そんな相手と夜な夜な有り余る妄想に耽れば、それは「疲れる」のはあたりまえである。

つまり、名住宅に泊まるということは、妄想の時空間なのであり、上述のような白日夢を記すに至った原因のすべてはこの建築にある。

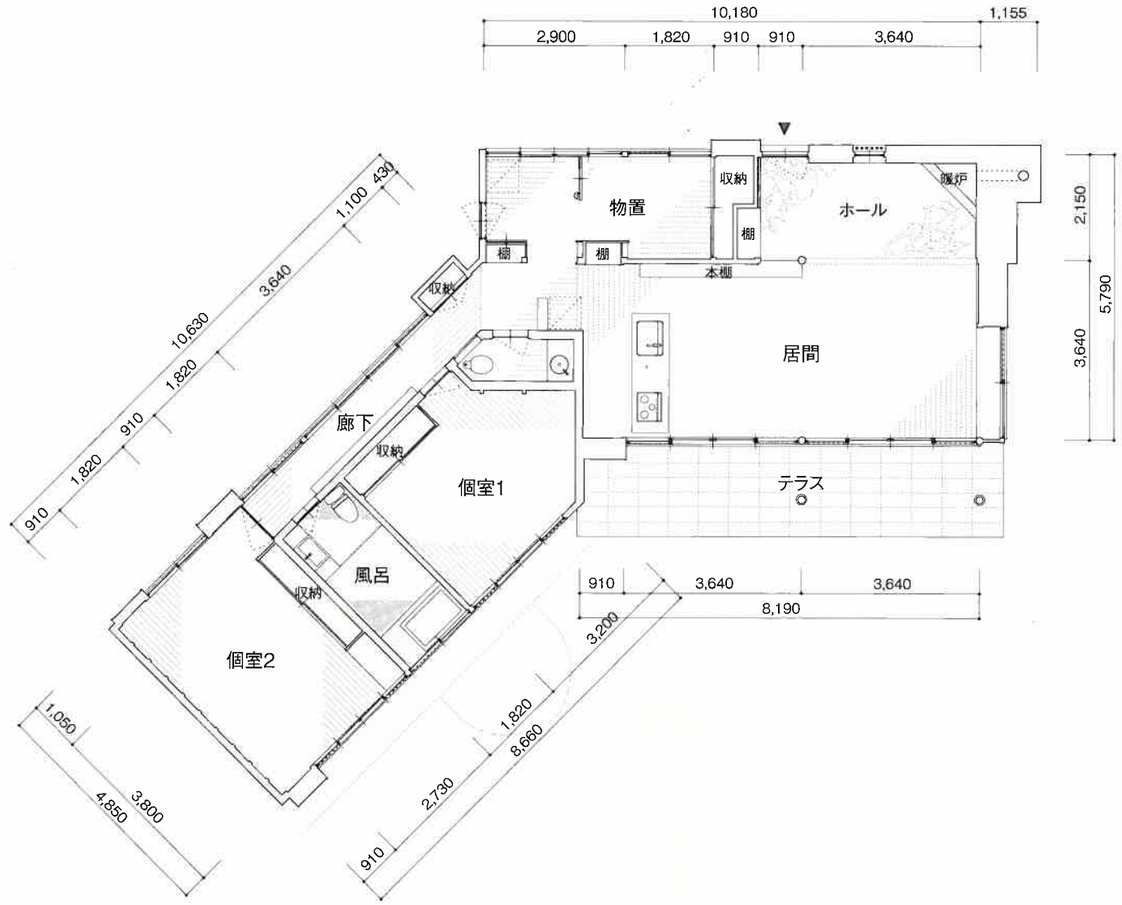
Tetens' Second House by Mayekawa Kunio

竣工時の天井と壁上部を残した浴室。ヒノキ板を大和張りにして通気を確保している。

平面図

0 1 2m

1/125



提供／土屋和男（常葉大学）、吉川文崇（キッカワデザイン事務所）

Special Feature
Stay and Study
at Heritage Houses

Case Study 01

旧テーテンス別邸

建築概要	
所在地	静岡県熱海市
主要用途	専用住宅／宿泊施設
設計	前川國男
敷地面積	498.0㎡
建築面積	115.64㎡
延床面積	105.81㎡
階数	地上1階
構造	木造
竣工	1942年

宿泊概要	
施設名	稲村ハウス
料金	1泊　1名28,000円、 2名からは追加10,000円 （税、サービス料別）
定員	1棟貸し、8名まで
チェックイン	15:00
チェックアウト	10:00
問合せ	https://itohen.world/

※宿泊情報は取材時点のものです。

Mayekawa Kunio

前川國男

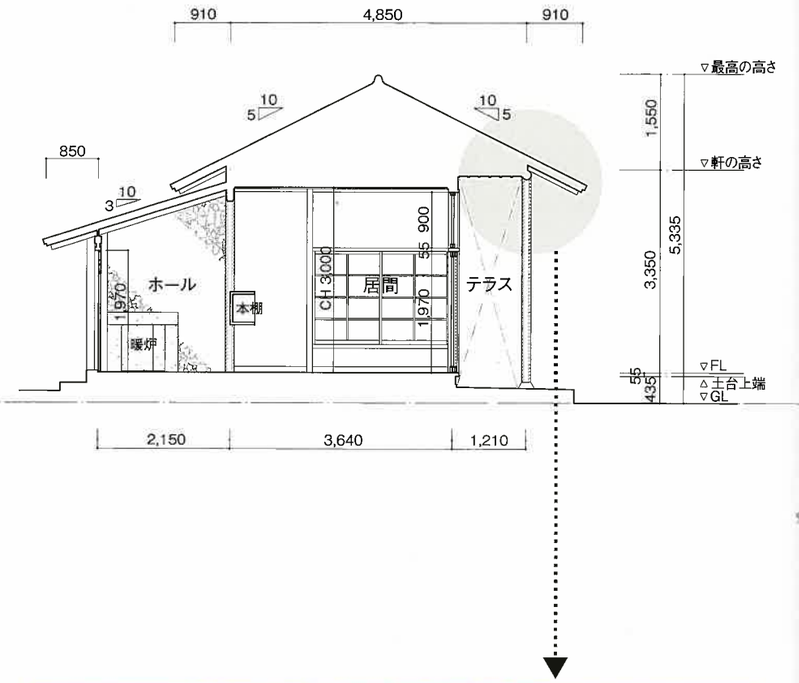
1905年新潟県生まれ。28年東京帝国大学（現・東京大学）工学部建築学科卒業後、渡仏。ル・コルビュジエのアトリエに入所。帰国後、30年レーモンド建築設計事務所。35年前川國男建築設計事務所を設立。86年逝去。おもな作品=「自邸」（42）、「神奈川県立図書館・音楽堂」（54）、「東京文化会館」（61）。

撮影／廣田治雄

断面図

0 0.5 1m

1/100



テラス上部。2本の円柱が軒を支える。

特徴的な半外部空間から
前川の設計に古典主義的な
一面を垣間見る。